

社員のみなさん。安岡定子論語塾の勉強をしましょう。

今回は、道に志し、徳に^よ抛り、仁に^よ依り、芸に^{あそ}遊ぶ。を勉強しましょう。(道に・・・)人として踏み外してはいけない正しい道、人に迷惑を掛けたりしない道義のもとです。ですからその道はただ漫然と歩むのではなく、志しをもって歩む自分はこういう人になるうという理想的な心を描きそれを目指して歩み続けることです。

(徳に抛り)徳とは人がもともと持っている「正しいことができる力」であるから道を歩む上では、その力を十分に発揮して正しいことは何かを自分で判断し、行動しなくてはいけません。(仁に依り)は、道を求めて行動する場合にはいつも仁(思いやり)を心の中に置いて、徳をもう一步進めて、どうすることが相手の幸せに繋がることなのか、相手に何をしたら喜んでもらえるか、を考え行動することが仁ある人の生き方ではないかと言えます。(芸に遊ぶ)とはどういう意味なのでしょう。ここでいう芸とは孔子が生きた時代の必須とされていた六^{りく}芸のことです。六芸とは、「礼」礼節「楽」音楽「射」弓術「御」馬車を操る技術「書」文学「数」数学の六つで、これらを修めてこそ一流のおとなとみなされていました。孔子が何より、重視したのは徳であり仁でした。「芸に遊ぶ」とは学問で頭がガチガチになるのではなく学問をとおして徳や思いやりを身に^{なんじ}着けるだけの心の余裕をもちなさいと、いう事だと思えます。「女、君子の儒と為れ、小人の儒と為るなかれ」お前は真実に道を求め

て学ぶ人になりなさい。単に立身出世を求めるひとになってはいけない」と言っています。が、視点を変えれば「知識にがんじがらめに

おもんばか

なつてはいけない。人の気持ちを慮り、心遊ばせられる余裕を持ちなさい」という戒めでもあるのです。それでは「仁」というもの「徳」というものを自分の立志として国を治めた。国民を真心を込めて思いやる、国民に感謝をする。そう言う天皇になろうとして、「仁徳」と名付けた仁徳天皇の話、即位四年目のある日、高殿にのぼって庶民の生活を見たら民家から煙が一つもたっていない。私が即位して四年間、なにをやったんだ、私の政治が悪いから、こうやって庶民の竈の炊けないような状況になっていると、自分の政治を反省します。仁徳天皇はこのように困窮した国民から税をとってはいかんといいことで、三年間の課税を停止しました。そして自分は質素をきわめた生活をし宮殿の修理もいつさいしないで貧しい生活に我慢します。「用を節して人を愛す」自分は節約をして、ひとのために尽くす、という意味です。課税を停止してから三年経って、民の竈から煙が立ち上ります。部下が「もう税金を課けていいでしょう」といったら、「いや、この状態は大阪だけだろう、もつと田舎のほうにはまだ竈の煙は上がってないはず」といって、さらに三年間、税を取らないでいました。合計六年無税で、その間、宮廷は荒れに荒れたと言います。天皇が業務を執る時には、雨が降ったら雨の降らないところを選んで机を移動して政務を執った。と

いう、

でも決して雨漏りを直せ、なんていわなかった。六年間経って、国民みんなの経済力が出たら、近所のお百姓さんたちが自主的に集まって、まず仁徳天皇のボロボロになった宮殿をなおしたのです。リーダーが誠を尽くし、国民に感謝をして、皆さんがいるから私がいると、そうして天皇自ら「恕」の行動を起こし、それに応えて自主的に国民が天皇に奉仕をするという。これが日本の古代のすがたです。 高き屋にのぼりて見れば煙立つ

民の竈かまどはにぎわいにけり。

これは課税停止によって、やっとうるおった国民の生活を見て詠んだ仁徳天皇の名歌です。人徳天皇に続いて聖徳太子の「徳」です。聖徳太子は、まず「徳」を大事にした。徳を二つに分け「天徳」「地徳」「人徳」としました。そのつぎに「仁」人のことを思いやっつてやること。もう一つ「礼」きちんと礼儀を施す。人を敬う心、をもつて「和」のせかいをつくる。次に「義」というのは弱いものを助けるということです。弱い立場の人を無視するのではなく、心から愛の手を差し出す。つぎは「信」は、嘘はつかない。言行一致です。聖徳太子は、十七条憲法一条に「和を貴しとなす」と明言した。彼の在職中は一件も内乱が起こらなかった。真心をこめてリーダーの心が正しく豊かで誠があれば決して国内はみだれないのです。

平成二十八年十一月

矢嶋正博

